

最優秀賞

テーマ1…医療と福祉、わたしの体験
『『できない』を『やめない』』

静岡県・静岡学園高等学校2年 代永夢空

「それって『チック』なんじゃない？」

友達に言われて初めて知ったその名前を、少しかわいらしいと思った。しかし、今ならわかる。そう思えたのは、何も知らなかったからなのだ。中学一年生の冬、私にチックの症状が現れた。授業中に突然けいれんのような動きが止まらなくなり、視線が私に集まった、心配した友達が症状を調べてくれて、私は「チック」に出会うこととなった。

しゃっくりをするかのような腹筋の萎縮から始まり、手や足、首にまで動きは広がっていった。最初は時々止まらなくなる程度だったのですが、特に気には留めていなかった。しかし、だんだんとその時間は伸びていき、私の心を蝕んでいった。何かに取り憑かれたかのように動き続ける身体は、もつ自分のものじゃないみたいだった。

何気ない学校生活が崩れていくのはあつという間だった。勝手に動く手では字が上手く書けない。引つかき傷のような荒ぶった筆跡は、自分で見ても何を書いているのか分からなかった。よく先生が声をかけてくださった。

「夢空さんは書かなくていいよ。」

温かい言葉のほずなのに、異様なほど冷たく感じた。できない自分が大嫌いだった。また、ご飯を食べることも難しくなった。箸を使う、おわんを持つ、口に運ぶ。当たり前だったこれらの動作が、いかに高度なものなのかを痛感した。食べようとしてもこぼしてしまうため、自力で給食を食べることはできなかった。何もできないから学校を休む、という決断はあまりにも酷だった。できないことをやめる。そんな変化、望んでなどいない。

しかし、変化を嫌う私とは対照的に、周りは沢山の変化を与えてくれ

た。字を書けない私を気にかけて、担任の先生が他の先生方にも掛け合ってくださり、自由に学校のパソコンを使えるようになった。キーボードを使うことで、メモを取りながら授業を受けたり、テストを受けたりできるようになった。また、母が毎日おにぎりを持たせてくれるようになった。口に運ぶだけのおにぎりは自力で食べることができ、ご飯を理由に帰宅することはなくなった。毎朝握ってくれる母のおにぎりは、栄養たっぷりに上に特別おいしかった。「自分でできる」という実感が活力になり、心が軽くなっていった。

私は、治すということを逆再生のように思っていた。今まで通りになれるように、元に戻す。だからこそ、治る兆しの見えない生活に希望を失っていた。「できない」ことは、「やめる」しかないのだと。しかし、家族や先生方、友達に支えられて初めて気付いた。できなくなったことは今まで通りでなくてもできる。やり方さえ変えれば、いくらだって道はある。

そして、これは支える側にも必要な考えだろう。誰かを支えるということは、その人ができないことをやってあげることはできない。やり方を変え、環境を変えることでできるようにすることだ。できていたことができなくなっていく現実には、目を逸らしたくなるほど重い。だからこそ、できない事柄から離れるのは、自信を失い、より一層傷を深める行為でもある。「できない」を元に戻して「できる」にすることが難しくても、「できる」やり方に変えて、少しでも自立に近づけることを、その誰かの生きる活力を生むのだ。

チックの症状が改善された今、私はリハビリ職を目指してこうして必死に字を書いている。周りの支えがなかったら、できなくなったことから離れていたら、ここまで来られなかっただろう。世の中には身体が不自由になった方が沢山いる。リハビリはそのような方々の「できる」を増やすためにある。例え今まで通りでなくても、できなくても、諦めない。やり方を変えて生まれる「できる」を増やす助けに、私はなりたい。